3 月 14 日佐土原キリスト教会 2021 年 3 月 14 日礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 16 章 16～16 章 24 節

説 教 題：悲しみが喜びに

カナダの神学校では、色々な貴重な学びをさせて頂きましたが、時には授業が終わった後、非常に落ち込んで教室を出ることがありました。全体の枠組み―(先生が何について話しておられるのか)―が分からないので、聞き取れる言葉があっても、教えようとしておられることが見えないのです。良く修了出来たものだと、今さらながら神様の憐れみに感謝することです。今、イエス様の「告別の説教」について学んでいますが、イエス様の説教を聞いている弟子達がそんな感じだったのではないかと思うのです。

今日の箇所は「告別の説教」の終盤になります。十字架は、もうそこまで迫って来ていました。それでイエス様の話も具体的になって行きます。ここでイエス様は「しばらくするとあなたがたは、もはやわたしを見なくなります。しかし、またしばらくするとわたしを見ます」(16)と言われました。しかし弟子達には分かりません。彼らは分からないから、お互いに「イエス様は何を言っておられるのだろう」とヒソヒソ話すのです。しかし、不安と混乱の中にいる彼らに向かって、イエス様は励ましの言葉を語られます。「あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜ぶのです。あなた方は悲しむが、しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります」(20)。「世」というのは「神に逆らう人々」と考えて良いでしょう。十字架の時、イエス様を敵視する人々は「イエスさえ死んでくれれば、後は万事上手く行く」と思ったのです。一方、弟子達にとっては「こんなことがあって良いはずがない」という経験です。彼らは一切を捨ててイエス様に懸けて来ました。その人生がガラガラ壊れて行くような失意、挫折を味わうのです。しかし、イエス様は「あなたがたの悲しみは喜びに変わ(る)」、「悲しみが悲しみのまま終わることはない」と言われたのです。この箇所は「キリスト者の希望」について教えてくれます。2 つのことを申し上げます。

１：「悲しみが喜びに変わる」

イエスは「あなたがたの悲しみは喜びに変わります」(20)と言われましたが、それはどのようにして起こるのでしょうか。ある英語の聖書は「悲しみが喜びにひっくり返る」と訳しています。「悲しいことがあったけれど、それに勝る喜びがあったので慰められた」ということではないのです。悲しみ自体が喜びに変わる、ということなのです。イエス様は、その例として出産のことを上げておられます。赤ちゃんが生まれる時、お母さんは大変な痛み、苦しみを通ると聞いています。しかし、子どもが生まれると、その苦痛が喜びに変わるのです。逆に言うと、出産の喜びは、苦痛を通してやって来るのです。苦痛が喜び生み出すのです。彼らの悲しみも「そのようになる」と言われるのです。

具体的にはどういうことでしょうか。16 節の「しばらくするとあなたがたは、もはやわたしを見なくなります」(16)というのは、イエス様の十字架の死、そして埋葬によって、イエス様が見えなくなってしまうということだと思います。20 節に「あなたがたは泣き、嘆き悲しむが」(20)とあるように、十字架は、彼らの夢の終わり、希望の終わりを意味していました。しかし、実際

はどうなって行くでしょうか。絶望のどん底で、後悔したり、悲しんだり、怯えたり、絶望したりしている彼らの許に、イエス様の復活のニュースが届き、「またしばらくするとわたしを見ます」(16)の言葉通り、イエス様ご自身が彼らの前に立たれたのです。驚きと同時に、湧き上がるような喜びに包まれたことでしょう。しかも、彼らには素晴らしい発見がありました。それは「イエス様は本当に神の許から来られた方だった」という発見です。自分達を弟子に招いて３年間一緒に歩いた方は、本当に神の許から来られた方だったという発見をするのです。

十字架の時、皆がイエス様を裏切りました。取り返しのつかないことをしたのです。しかし復活のイエス様が弟子達のところに現れて、「平安あれ」と言って彼らを祝福された時、彼らは、赦されてあるという祝福に与るのです。彼らの夢も希望も将来も、全てをうち砕いた十字架が、彼らがそのままで―(弱いところがある、裏切りもした、しかしそのままで)―神に赦され、迎えられる、神の子とされ、天国へ行く者とされるという、神の赦し、愛と恵み、祝福のシンボル、喜びの基となるのです。

その後も、彼らには色々な困難がありました。然し、彼らはもう希望をなくすことはなかったのです。どんなことがあっても、主の十字架によって赦された自分達は、神の御手の中で生きている、最後は神が責任を持って下さる、何より復活のイエス様がどこまでも共にいて下さるという安堵感、慰めと希望を生きるのです。遠藤周作の「侍」という歴史小説があります。藩の命令でローマに行き、クリスチャンになって日本に帰って来た長谷倉という侍は、キリスト教迫害下で死罪になります。彼につき従って来た下男が処刑場で「ここから先はもうお供は出来ない」という場所まで来た時、長谷倉に向かって叫びます。「ここから先はあの方が、あの方が一緒に行かれます」。弟子達は、その慰めを生きて行くのです。その思いを彼らに確信させ続けるのが、十字架、そして十字架を通してやって来る主の復活なのです。パウロは言います。「私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています…この恵みの信仰に導き入れられた私達は…艱難さえも喜んでいます…」(ローマ 5:1～4)。十字架を握った彼らは、艱難さえも主にあって喜びと思えるようになるのです。なぜなら、十字架には復活が続くことを知ったからです。つまり、患難がただの患難で終わらないことを信じることが出来たからです。

「あなたがたの悲しみは喜びに変わります」(20)、このイエス様の言葉が書き記されたのは、十字架と復活の 60 年後です。その間、弟子達も様々な形でこの言葉の真実を経験したのです。だから確信を持って、このイエス様の言葉を書き伝えたのです。私達にも悲しみがあり、嘆きがあります。しかし私達の希望は、「あなたがたの悲しみは喜びに変わります」(20)と、「悲しみは悲しみのままで終わらない」と、イエス様が言って下さっていることです。キリスト教信仰の素晴らしさは、正にそこにあると思います。

先日のお便りの中にレーナ・マリアさんのお母さんの言葉を書いたのですが、実は前段があります。レーナさんが生まれた時、お母さんは「私は妊娠中、お腹の子供に悪いような薬を服用したこともなかった。それでも、この子がこういう体になったのは、私達のせいではないか」と自分を責めて悩んだのです。「どうして、私達にだけ、こういう子供をお与えになったのですか」と何度も神様に問いかけ、愚痴をこぼしたのです。神様の愛が見えなくなったのです。しかし、

レーナさんは神様の命、神様の力によって明るく、たくましく成長して行ったのです。そして、神様を愛し、神様を讃え、喜んで神様に自らを捧げて行こうとする今の彼女を見て、お母さんは言うのです。「『彼女を見ていると、自分が小さな問題で不満を言ったり、悩んだりするのが恥ずかしくなる』と多くの方々から言われて来ました。これは初めから、神様がレーナと共にいて下さり、あの子を支え、生きる喜びを注いで下さったからです。親の努力や心がけでこのように育つものでないことを、私達自身が一番良く分かっています」。大変なところを通られたでしょう。しかし「神様、どうしてですか」という悲しみが、「神様、ありがとうございます」という喜びに変えられたのです。「悲しみが喜びに」、考えることもお出来にならなかったのではないでしょうか。しかし、神はそれをして下さる方なのだと、そのことを教えられます。

イエス様の下さる喜びは、ある場合は、悲しみを通して深い神の恵みを体験できる、振り返って見る時、「あの悲しみの中で、悩みの中で、神が働いて下さった」という実感して感謝する、そういう面があると思います。しかしそれは、生きている限り、何かしら悲しみを、苦難を抱えざるを得ない私達にとって、大切な、かけがえのない喜びだと思います。

２：「喜びは祈りを通してやって来る」

イエス様は「悲しみは喜びに変わる」という話をした後で「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたはが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものになるためです」(23～24)と言われました。「私の名で願いなさい」とは「『イエス様の御名によってお祈りします。アーメン』と祈りの最後につけなさい」ということだけではありません。聖書では、名前はその人の全人格を表します。イエス様の御名によって祈るとは、イエス様の人格に調和した祈りをするということです。イエス様がその伝道生涯において教えられたのは、「あなたの神である主を愛せよ…あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(マタイ 22:37～39)ということでした。ですから、私達が本気になって神様を愛せるように(神様に従えるように)、また人を愛せるように祈る時、神は必ず私達の祈りに答えて下さるのです。

しかし今朝のメッセージのテーマに関連して申し上げたいことは「祈りにはそれ以前の恵みがある」ということです。星野富弘さんが、事故で首から下が動かなくなって、病床で苦しい思いをしておられた時、気付かれたことは「自分には、嬉しい時にその人に感謝し、苦しい時にその人の名を呼ぶ、そんな人がいない」ということだったそうです。そんな時、大学の先輩が持ってきた聖書を通して「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ 11:28)の言葉に触れ、この言葉を通してイエス様に出会うのです。「わたしが、けがをすることなど、夢にも思っていなかったずっとまえから、神様はわたしのために、このことばを用意してくれていたのではないかと思いました。聖書に書いてあるイエス・キリストという人が、わたしをだきあげて、わたしのいうことをやさしく聞いてくれるような気がしました」。色々なことが自分にやって来た時、そしてそれをどこに持って

行って良いか分からない時、神に祈ることが出来るということ、神に自分の願いをぶつけることが出来るということ、このこと自体が、実は喜び(希望)ではないでしょうか。自分でどうにもならないことを「お願いします」と言えるお方がおられるということ、大きな幸いではないでしょうか。

そして、「お願いします」と言って終わりではありません。祈りの中で、本当に静まって魂を神に向けて行く時、私達は神に触れて行くのです。交通事故で同乗の婚約者を死なせてしまった女性がいました。自分が責められ、夜も睡眠薬なしでは眠れない、どうしようもなくなった時、ある牧師に「神に事故のことを感謝していますか。聖書には『全てのことを感謝しなさい』と書いてありますよ」と言われるのです。「『感謝しなさい』と言っても…出来るはずがありません…でも…じゃやってみます」。それから彼女は「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、すべての事について、感謝しなさい」(1 テサロニケ 5:16～18)の御言葉を何度も何度も読んで、そして神に祈ることを始めるのです。不思議なことに、その時から彼女は少しずつ癒されて行くのです。祈りの中で神の力が彼女に働くのです。「わたしの名によって…求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものになるためです」。イエス様は、私達が神に触れ、喜ぶことのできる方法を教えて下さったのです。

今日、「キリスト者の喜び」について学びました。お一人びとりが様々な状況を抱えておられるでしょう。しかしイエス様は言われました。「あなたがたの悲しみは喜びに変わります」(20)。新しい週、このみ言葉を握りしめ、神に期待し、信頼する週でありたいと思います。